

[史料]

アウクスブルク市の支配を夢みた人物、 ペーター・エゲン (1413 – 51 年) について (2)

「ブルッカルト・チンクの年代記 (1368 – 1468 年)」より

山 本 健

On Peter Egen, Who Failed in
Ruling the City of Augsburg (1413–51) (2)
— *Chronik des Burkard Zink, 1368–1468* —

Takeshi YAMAMOTO

アウクスブルク市の支配を夢みた人物、 ペーター・エゲン (1413 – 51 年) について

目次

- | |
|---|
| I はじめに——ペーター・エゲン事件の意義について |
| (1) その意義について——パクトビルガートゥーム
(Paktbürgertum) との係わりで |
| (2) 史料から見えるチンクとペーター・エゲンの関係 |
| II テキストの邦訳 |
| 第1章 ペーター・エゲンなる人物の生い立ちとその人柄の変化 |
| (1) エゲン家について |
| (2) 若きペーター・エゲンの人柄と市長職への就任 |

- (3) 市長職を重荷と感じ始める若きペーターの苦悩
- (4) 国王フリードリヒ3世との出会いと
変わるペーターの性格

第2章 ペーターの「市民権の返上」事件と ツンフト親方層・市参事会の反応

- (1) 個人の権利を追求するペーターと
彼の奇策「市民権の返上」
- (2) ツンフト親方たちの困惑と慰留願い
- (3) 市参事会員たちの猜疑心とペーターの本心
- (4) ペーターの狙い——自由〔特権〕証書の獲得とその内容
- (5) 市参事会の対応についてのチンクの見解

〈以上、第32号（2019年3月）掲載〉

〈以下、本号〉

第3章 都市共同体の秩序と「個人」の自由との軋轢「事件」

〔A〕 子どもたちの「結婚」をめぐる有力家の対立 ——ペーターへの反撃の始まり

- (1) アウクスブルク市での
『ロメオとジュリエット』問題の発生
- (2) 「恋愛結婚」をめぐる両家の対応
- (3) 「結婚の誓い」をめぐる裁判での
誹謗中傷に傷つくペーター

〔B〕 有力市民にとっての市長職の実態と市参事会の関係

- (1) あらぬ疑惑に立腹するペーターと
再度の「市民権の返上」宣言
- (2) 政務多忙なわりに実入りの少ない市長職への
不満と批判
- (3) 市長在任中の刑の執行回避要請を無視され、
都市から退去（1450年11月）

第4章 市参事会の侮蔑的な要求と新たな法廷闘争

〔A〕 騎士団の介入とアウクスブルク市との仲裁交渉

(1) 聖ゲオルク騎士団を頼ったペーターと

ギュンツブルク会議

(2) ミンデルハイム会談での仲裁交渉 (1451 年 11 月 29 日)

〔B〕 仲裁案を台無しにした「言葉 (ガスト: Gast)」から

法廷闘争へ

(1) ガストとして公的宿屋への要請とメンツの問題

(2) ペーターによるブランデンブルク辺境伯の

ラント裁判所への告訴

(3) アンスパハ・ラント裁判所での審理とその意外な結末

(4) アウクスブルク市による宮廷裁判所への

上訴とその判決

〈以下、次号〉

第5章 ペーターの死去とその後の裁判経過

そしてチンクの感慨

(1) ペーターの死亡〔殺害〕(1452 年)

(2) 同裁判を引き継いだ遺族たちと

ラント裁判所の判定 (1459 年)

(3) 訴訟合戦についてのチンクの感慨

注記

索引

〈タイトルは暫定訳〉

(注記) ①訳文の〔 〕内の日本語は、理解を容易にするために訳者が補充したものであり、() 内は原語である。

②各章内の小見出しも、同様な趣旨から訳者が書き加えたものである。

③当該テキスト〔「ブルッカルト・チンクの年代記 (*Chronik des Burkard Zink, 1368-1468*) の第4巻 (Das Buch IV, 1416-1468)」、196-207 ページ。「かつて、ペーター・エゲンと呼ばれたペーター・フォン・アルゴンについて」(Von Peter von Argon, die vor Peter Egen hieß)〕で断片的にしか記されていない内容で、他巻や付録に詳論されている場合には、上記の趣旨から【補遺〇】を書き加えた。

④テキストの(注)は一括して末尾に、各章ごとにまとめて記した。

⑤索引(人名、事項そして地名・国名)を注記の後に、独立した形式で付記し、掲載分冊番号とページ数を記した。

第3章 都市共同体の秩序と「個人」の自由との軋轢「事件」⁽¹⁾

〔A〕子どもたちの「結婚」をめぐる有力者同士の対立

——ペーターへの反撃の始まり

(1) アウクスブルク市での『ロメオとジュリエット』問題の発生

ところで、当地アウクスブルク市に、ラウギンゲン市 (Laugingen) 出身でクラウス・コボルト (Claus Kobold) という裕福な都市門閥 (herr) に属する人物がいた。彼は〔1428年、同じく都市門閥に属する老ホーフマイヤー (alter Hofmaier) の娘バーバラ (Barbara)⁽²⁾ と結婚し、アウクスブルク市の市民権を取得していたのだが、〕⁽³⁾ 1437/38年に早死した。また妻バーバラもその直後に死亡したため、この夫婦の3人の幼児〔すべて女性〕の中で、一番下のアフラ (Afra) は遅くとも1443年に死亡したので⁽⁴⁾、孤児になったのは姉のバーバラと妹のフェリツィタース (Felititas) の2人であった。彼女たち2人はまだ幼かった (jung) ので、ペーターとその妻エリザベートが彼らの許に引き取り、そして彼女たちが成長し、成人に達するまで、彼女たちを行儀・作法の行き届いた〔立派な (in erbarkeit)〕人物に養育した。小さいお嬢ちゃんたち (die Tochterlin od.jungfrauen) は、それ故〔ペーター・フォン・〕アルゴン〔家〕の親族になり、同家の親族の一員に所属する〔眷属〕と理解されたのであった。したがって、彼女たちが親族〔例えば、イムホーフ家 (die Imhof) やツォルラー家 (die Zoller) など〕の家々に〔預けられて〕暮らしていたとしても、至極当然であった⁽⁵⁾。

とは言え、若い娘たちが〔いかに〕良き〔厳しい〕躾や〔「親」の〕監視〔huet〕の下で育てられたとしても、それはそれ、若い妹〔フェリツィタース〕は〔やがて〕1人の若い市民と——〈おそらく、舞踏会場 (bei einem Tantz) ないしは〔男女の出会いが生まれる〕類似した所で〉——運命的な出会いをしたのであろう。そして2人は〔とくに妹のフェリツィタースは育ての親のペーターの意に反して〕結婚 (die ee : Ehe) の約束をし、やがて互いを拘束する言質を取り交わすに至ったのであった。すなわち、彼ら2人

は互いに結婚の約束を認める書簡——〈その中で、この2人の若者たちがしばしば送っていたような「2人が相思相愛であった」(sie ainander gern gehapt hetten) ことが十分に判る書簡〉——を送り交わしていたのである。

ところで、彼女の相方の男性は裕福な市民〔ランゲンマンテル家 (die Langenmantel)〕の息子で、名をハンス (Hans) ⁽⁶⁾ という、若い有能 (frum) で、評判の良い市民であった。しかし、彼〔の家〕は相方の女性〔の家：コボルト家〕よりは裕福ではなかったが、〔それでも〕評判の良い、そして立派な都市門閥〔erbers und guets geschlechts〕に属する〔家柄〕であった。

ところで、若き娘も、また若き青年も互いに結婚の約束を取り交わしていたことが公にならなかったことから、この結婚——〈「恋愛結婚〔Liebesheirat〕はたまた「秘密結婚〔Gehaimheirat〕」⁽⁷⁾〉——は秘密裏にされていた〔に違いない〕。

(2) 「恋愛結婚」をめぐる両家の対応

しかし、おそらく、双方の親〔族〕たち (ir baiden freund) はそのことに〔うすうす〕気づいていた〔ようであった〕。双方の親〔族〕たちは相手側の親〔族〕を、とくにフェリツィタース〔本人〕を気づかい、若い2人が互いに行なった彼らの「結婚の誓い (glübde)」を有効なものとは認めなかったようだ。

(i) 娘側：アルゴン家の対応

ペーターは〔1456年頃に「娘」のフェリツィタースを隣の帝国自由都市ウルム市に〕連れて行き、そして彼女をウルム市出身の〔ヴィルヘルム・レプフーン (Wilhelm Rephun)〕という1人の男性と娶わせた〔彼女は「再婚」となり、その再婚期間は1456－1498年である〕⁽⁸⁾。この件で、ペーターは多くの人に助言を求めず、「自分1人で決定した。」そして、ペーターは「自分は良いことを行なった」と思っていた。しかし、確かに「良かった」のはこの途中までであったようだ。〔何故なら〕それ以降 (sider)、大きな災い (großer unrat : unheil) と大きな争い (große unfreuntschaft) が〔彼ペータ

一の許に〕生じたからであった。

(ii) 青年側：ランゲンマンテル家の対応

ところで、ハンス・ランゲンマンテルが、ペーターが「娘」フェリツィタースを1人の男性と娶わせたことに、さらに、そのため彼女に、婚姻法上、その男性の妻とならざるをえない〔義務が生じた〕ことに気がついた時、この事実をどうしても甘受できず〔彼女を諦めきれず〕、そして彼は彼女との関係(es)を自分の親〔族〕に洩らし〔公開し〕た。そして、彼の親族たちは若い2人のために、聖界裁判所(das geistlich gericht)に訴えることにした。そして各陣営は自分の正当性(glimpf)を主張した。それ故に、ハンスは法廷で〔自分とフェリツィタースが取り交わした「結婚の誓い」という〕事実がどのように裁かれるのか、最善を尽くした。

(3) 「結婚の誓い」をめぐる裁判での誹謗中傷に傷つくペーター

ところで、私ことチンクも法廷に出廷させられた。やがて、一方の陣営にはペーターとフェリツィタースを娶ったウルム市出身の夫が、他方、もう一方の陣営にはハンスと彼の親〔族〕が出廷し、互いに口頭で批判しあった。しかも、各陣営は相手側に傲慢で、

尊大な言葉[uppige und stoltze wort]を吐いて〔罵りあった〕。ところで、その〔際に、相手が吐き捨てた一部の〕言葉にペーターは甚く不快感を覚え、その言葉をひどく邪推し、そして大いに立腹すると共に、非常に心を痛めたのであった。

〔B〕 有力市民にとっての市長職の実態と市参事会の関係

(1) あらぬ疑惑に立腹するペーターと再度の「市民権の返上」宣言

そこで、突然ペーターは市参事会〔の議場〕で立ち上がり、〔法廷でランゲンマンテル家から浴びせられた罵詈雑言の〕言葉の一部〔「市長の特権乱用」(訳者)か〕の事で苦言を呈し、さらに「自分はランゲンマンテル家側の法廷(da)で自分を批判したような事は期待していないし、また〔このような侮辱を受けた今となつては〕もはやここアウクスブルク市の市民として、これ以上、留まりたくはないので、市民権(burgrecht)を返上したい」

旨、〔市参事会の議場で〕宣言した。〔この件については〕彼が市参事会に提出していた文書〔の控え書〕が彼の手許に残っていた。〔それには〕「もし、都市住民 (man) が自分にアウクスブルク市民として留まってもらいたいと思うならば、自分としては〔低額の〕契約課税 (mit einem geding) という付帯条件がつけてもらえば、喜んで汝らアウクスブルク市民の許にとどまる意向でいる。しかし〔念を押すが〕、もし自分が以前の〔高額な都市税を納付する〕状態のままに留められるのであるならば、自分はもはやアウクスブルク市に留まる気などはさらさらしない」旨、記されてあった。

これには、市参事会の大・小を問わず、全体 (ain ganßer rat) が彼の申し出に反対した。そして市参事会は彼にそのような怒りと不満 (zoren und unwillen) を抑えるように要請した。ただし、もし誰かがペーターに反対の実力行使をしたり〔彼の意に反する行動をとったり〕、あるいは〔言論で彼を〕批判し〔戒め〕たりした場合〔すなわち、ペーターが第三者から不利益なことをされた場合〕には、その〔行為〕はペーターに大きな名誉で償われることになり、そのことを (das) ペーターが市参事会に訴えることや、またこのような行動を (solchs) ペーターが名誉と友情のために市参事会に訴え出ること〔すなわち、法的な対抗措置〕も一応、正当なこととして〔市参事会は〕彼に〔認めていた程であった〕。だが、彼はそのようなこと〔対抗措置〕を行なおうとはせず、怒りながらもそれ以上の弁明はしなかった。

（２） 政務多忙なわりに実入りの少ない市長職への不満と批判

ペーターも以前に、〔確かに〕幾人かの正直な人たち〔市長 (etlich biederleut)〕が——〈彼らは裕福で政治力があり (mechtig)、また有能で誠実であり、さらにアウクスブルク市に常に忠実で、また尽力した人たちであったのであろう。さらに極めて僅かな金額ないし最低限の報酬 (gar klainer oder ublen lohn) しか貰っていなかった〔市長〕が〉——なぜか添え名〔異名 (beim namen)〕——〈これは一般人 (man) ならばなかなか取得できない——〔もし取得しているならば、それは不正な方法で取得した〕——ものであった〉——で呼ばれていたことを耳にしたことがあった。

そのような人物の1人がルートヴィヒ・ヘルンリン (Lutz <Ludwig> Hörnlin)〔? - 1419年〕⁽⁹⁾であった。彼も政治力のある人物 (gewaltig mann) であった。そして、もう1人はフォン・ラドウ (von Radaw) と呼ばれていたヨハネス [ハンス]・ランゲンマンテル (? - 1426年) ⁽¹⁰⁾ であった。この者は死去するまで、確かに有能で、賢明な人物 (ein frummer weier man) であり、都市内での多くの行政上の重要な諸問題を処理し、かつ遂行していた。しかし、実際には、最低限の報酬さえ貰えず〔ほとんど無報酬で〕、ただ特別な賞賛と感謝だけをアウクスブルク市から得ていたにすぎなかった。

そして、この時も、ペーターは「自分にもこの後〔都市から〕報酬が支払われるかもしれないが、しかし自分は〔市長としての報酬などを〕期待しておらず、もはや汝ら〔アウクスブルク市〕の市民として留まるつもりもない。ただし、〔低額の〕契約課税という付帯条件がつくのならば〔その限りではない〕」旨、発言していた。

ところで、ペーターが〔改めて、この市長職の報酬の件に〕触れた時、確かに彼のこの発言 (das) は市参事会には良い感じを与えなかった。〔その理由は〕彼はまるでアウクスブルク市の先達〔市長〕たちを冒瀆し、また名誉ある市参事会に対しても、面前であたかも市参事会が〔市長経験者たる〕古老〔先達〕たちに〔市長職の報酬をめぐる〕何らかの不正を行っていたかの如くに、また〔現在でもその無報酬という習慣を継承して〕、市参事会員たち (man) があたかも何らかの〔市長報酬について〕不正を〔市長たる〕ペーター自身に行なおうと画策しているかの如くに、批判したからである。しかし、市参事会はこれまでそのような〔市長への報酬不払いという〕不正行為を決して行なっていなかったし、また〔これから〕行なうなどとは考えてもいない。そこで〔市参事会員 (man)〕がペーターに対して次のように〔反論として〕問いただした。「誰がいったい貴方様に『そのような〔報酬不払いという〕事を〔市長職の経験者たる〕正直な人々に行なっていた』などという〔とんでもない〕話を語っていたのですか。そのようなことを貴方様に吹聴した人物こそが市参事会に不正を行っていた

のではないのでしょうか？」と。この時は、〔双方の応酬は〕これで終わった。そこで、市参事会は閉会し、ペーターは自宅へと帰宅した。

（３） 市長在任中の刑の執行回避要請を無視され、

都市から退去（1450年11月）

ところで、ペーターは〔当時まだ〕市長職に就いており、その在任期間はまだ山王礼拝の日〔1月6日（der oberste tag）〕まで残っていた。それにも係わらず、人々は〔彼の後任者たる〕もう1人の市長を選出しようとしていた。

ところで、〔当時〕1人の婦人（ain frawen）が逮捕されるという事件が起こり、土曜日の朝〔午前中〕——〈この日、ペーターも市参事に登庁していたのだが〉——この女性に有罪判決が下される予定であった。〔しかし、この行為は、市長在任中に刑の執行を行なわない旨、主張していた市長ペーターと対立するため〕市参事会はペーターと極めて穏やかに話し合い、〔刑の執行に不快感を示す〕ペーターに不満を抑えるようにお願いした。〔結局〕ペーターは市参事に留まったが、それは、〔アウクスブルク市の〕貧しき者も富める者も（arm und reich）ペーターの慰留に努めたからであった。

さて、〔慰留を求められた〕ペーターは市参事会で〔発言を求めて〕立ち上がり、「〔アウクスブルク市の〕住民は（man）、私が〔主張していた〕市長在任中に〔刑の〕執行は一切行なうつもりがない〔という約束〕を疑っていないようだし、また私に良く尽くしてくれているようだ」などと〔安堵の気持ちを〕語り、そして「もし、私がこの後（darnach）、何らかの〔刑の〕執行を決断せざるをえない場合には、その執行（das）は汝ら市参事会員全員の英知〔決定／答申（weisheit）〕に照らして、しかも公開で、行ないたい。もちろん、私は〔本音では〕いかなる〔刑の〕執行をも望んではないが、しかし（dann）市参事会の同意と承認が得られるのであるならば（mit eines rats wissen unt willen）、その限りではない。」と口を滑らせてしまったのである。〔つまり〕ペーターは〔心の中で〕重要だと言いたい「市参事会の同意（das）」を〔ついつい、口を滑らして〕重要だと断言したのであった（das redt er als hoch als ers reden mocht）。

私ことチンクもその場にいた。そして、この発言 (das) は市参事会には確かに大いに好評であった。すなわち、人々〔市参事会員たち (man)〕はペーターの〔この、「市参事会の同意」を重要とする発言から〕彼の不満は和らいだものと判断したが、しかし、そうではなかった。ペーターは幾人かの市参事会の顧問官たち (ratgeben) と一緒に裁判所に赴いたが、〔法廷では、市参事会の決定で〕その女性は有罪となり、そして死刑の判決が言い渡されてしまった。その後、〔市長在職中の刑の執行回避要請を無視され、面子を失った〕ペーターは〔そそくさと〕帰宅した。

〔私ことチンクの言い訳になるかも知れないが、しかし、一応〕以下のことだけは伝えておきたい。〔すなわち〕ペーターが市参事会から帰宅した時、私ことチンクはペーターに同行して彼の自宅に伺い、そして自宅に留まって彼と〔刑の執行をめぐって〕まる一時間 (ain gantze stund) 議論し、できる限り彼の不満を取り除こうと努めた。しかし、彼は非常に強情であり、私は彼の気持ちを覆すことはできなかった。それ故に、彼は〔以前から主張していたように、アウクスブルク市からの退去を最終的に〕決断し、その日のうちに馬に乗って同市を立ち去ったのであった。これは1450年の12月5日のことであった⁽¹¹⁾。

彼は、その後、決してアウクスブルク市にその元気な姿を現すことはなかった。しかも、ペーターは、その後語られるように、彼があの日開催された市参事会で語った発言、たとえば (wie)、刑の執行を望まない彼が〔ついつい口を滑らせて〕「市参事会の同意と承認が得られればその限りに非ず」と語った発言を——〔逆手に取られて、市参事会の総意で処刑は断行され、彼は大いに面子を失ったことに気づき〕——恥じ入り、そしてその日のうちにそそくさと馬に乗って、市参事会の承諾を得ずに〔逃げるが如く〕同市を後にしたとか、さらにはまことしやかに死亡したのでは〔という噂まで〕流布されるありさまであった。そのような〔根も葉もない〕噂話を (das) 〔ペーターが退去した真実を知っている〕私ことチンクは流布されるままに放っておいた (das lass ich sein, als es ist)。

第4章 市参事会の侮蔑的な要求と新たな法廷闘争⁽¹⁾

〔A〕 騎士団の介入とアウクスブルク市との仲裁交渉

(1) 聖ゲオルク騎士団を頼ったペーターとギュンツブルク会談

次に、〔是非とも〕伝えておかねばならないことは、ペーター (der von Argon) が馬に乗ってアウクスブルク市を立ち去ってまもなくして、シュワーベン地方の〔聖ゲオルク〕騎士団 (die St. Georg Gesellschaft in schwaben) が〔ペーターとアウクスブルク市参事会との間で生じた〕訴訟案件を引き継いだことである。やがて、ペーターもこの騎士団の中にその姿が確認された。

【補遺8】 同騎士団 (Rittergesellschaft) は聖ゲオルグ同盟 (St. Georgenbund) から成り、15世紀初めの頃からその存在が確認されていた。同騎士団は皇帝ジギスムンドの時代〔在位：1410 - 1437年〕以降、ますますその存在意義を高めた⁽²⁾。

【補遺9】 アウクスブルク市での両陣営の会談取り決めをめぐる交渉について⁽³⁾

同騎士団の当時の首領 (Hauptmann) はベア・フォン・レヒベルク (Ber von Rech-berg) であり、幾人かの騎士をアウクスブルク市に送り込み、市参事会との訴訟案件の段取り〔会談の開催場所とその日取りなど〕の交渉を求めてきた。

それは、例えば、同市の『出納帳簿 (Baumrechnung)』の「1451年8月1日」の項目に⁽⁴⁾、

① 「2ポンド2シリングを支出：これは、騎士マルクヴァルト・フォン・シェレンベルク (her Marquart von Schellenberg) と騎士ハンス・フォン・クネーリングゲン (her Hanns von Knöringen) に対する振舞いワイン (schenkwein) の代金である。

② 2ポンド2シリングを支出：これは、騎士ハンス・フォン・シュターディゴン (her Hanns von Stadigon) と騎士エーベルハルト・フ

オン・シュタイン (her Eberhardt von Stain) に対する振舞いワインの代金である。」と記載されている。

この事実から、両陣営がアウクスブルク市で会談をめぐる何らかの交渉が行なわれていたことが推測される。

しかし、その会談の日取りと開催場所をめぐる交渉は二転三転したものの、以下のような経緯で、ギュンツブルク市 (Günzburg) での開催で合意に至った⁽⁵⁾。

まず、騎士団の首領ベア・フォン・レヒベルクから「8月28日、ギュンツブルク市での会談開催」を提案されたのに対して、アウクスブルク市参事会は「準備する」時間があまりにも少なすぎる〔との理由で〕拒否し、逆に「9月9日、エーインガー市 (Ehinger) での会談開催」を提案した。これに対して騎士団側〔首領ベア〕は改めて、「10月1日、会談場所をミンデルハイム (Mindelheim)、ウージンゲン (Usingen)、ブルガン (Burgan) そしてギュンツブルク市のいずれか」での変更を提案してきた。両陣営は最終的に10月1日、ギュンツブルク市で開催することで合意した。

◆ギュンツブルク会談 (1451年10月1日)⁽⁶⁾

このギュンツブルク会談には、ニュルンベルク、ウルム、ネルトリンゲン (Nördlingen)、ディンケルスヴュール (Dinkelsbühl)、メミンゲン (Memmingen)、カウフボーレン (Kaufbeuren)、グミュント (Gmünd) そしてロイトリンゲン (Reutlingen) の各都市の代表者たち (Boten) も参加した。〔同会談で〕騎士団の首領ベアがバーターを伴ってアウクスブルク市を訪ねることを申し出たが、アウクスブルク市の2人の代表者たるルードヴィヒ・ヘルンリン (Ludwig Hörnlin) とウルリッヒ・レヒリンガー (Ulrich Röchlinger) にはベアの申し出を聞き入れる権限がなかったため、ギュンツブルクでの交渉は、ただ一点「1451年11月29日にミンデルハイム市での新たな会談開催の取り決め」を除けば、何らの成果もなく終了した。

(2) ミンデルハイム会談での仲裁交渉 (1451年11月29日)

〔こうして、ミンデルハイム〕会談が設定されたので、ペーターは同地に赴いた。またアウクスブルク市参事会はルートヴィヒ・フェーゲリン (Ludwig Vögelin) とアンドレス・フリッキンガー (Andres Frickingger) を使者としてミンデルハイムに派遣した。そして同地で彼らは議論し、ある〔暫定的な〕合意を取り交わすに至った。そして上記の2人の使者はこの〔合意案〕件を〔記した〕暫定的な覚え書 (ein Nottel) を持ち帰った。この覚え書が市参事会で読み上げられ〔検討され〕たが、受け入れられることはなかった。〔むしろ〕受け入れを拒否したことは (das) 市参事会にとっておおいに好都合であった。〔その理由は〕覚え書には、アウクスブルク市側にかなり不利な内容が含まれており、〔この件を〕審議する〔時間かせぎ〕のためにも、拒否したことはおそらく満足のいくことであったからである。

〔これに対して〕ペーターも「この覚え書は〔十分に〕議論されたものではない」と反論し、そして幾つかの点で異論を唱えていた。

◆不和の背後にある市民を呪縛する要因についてのチンクの感慨

〔双方の言い分について〕私ことチンクは〔遠く離れたミンデルハイム市で決定されたことでもあり〕どちらが正当で、あるいは不当であるのかは分らない。しかし、それにもかかわらず、〔どうやら合意の受け入れを渋る理由は (es)〕道徳的にかなり下劣なレベルのもの (wol schlecht) であった。人々はそれを「些細なこと」などと主張していたが、〔それは〕ペーターを嫌う幾人かの人々の間で〔依然として〕渦巻く非常に大きな嫉妬 (der Neid) であった〔のではと、私は思っている〕。

その後、〔上記のように、先が見えない袋小路に陥った感のする交渉を打開すべく〕騎士団からは首領のベア・フォン・レヒベルク〔本人〕が、助言のために送り込まれた。彼は確かに、この案件を仲裁しようと可能な限りの助言を与えた。しかし、彼の助言も役だつことはなかった。つまり、合意には至らなかったのである。

すなわち、ペーターはすでに〔当事者同士による〕ミンデルハイム〔の初めの仲裁会談〕で得た〔彼に有利な、しかも暫定的にせよ合意した〕覚え書に

固守し、アウクスブルク市側でも同様で〔市側に不利な暫定的な覚え書を頑なに拒否するだけ〕であった。つまり、両陣営はそれぞれ自己の正当性をかなりの間、主張していたのである。しかし、以下で述べるような条件をのむことで、ようやく、アウクスブルク市陣営も〔暫定的であれ、一度合意した〕覚え書〔内容〕を受け入れ、他方ペーターはこの案件を〔正式な〕法廷での仲裁に一任することで〔歩み寄り〕、両陣営は〔一応の〕合意に至ったのであった。

その条件は、すなわち、①ペーターがアウクスブルク市民たちに〔かつて彼が行なった〕侮辱を償う義務を負うことであり、また②ペーターがかつて市参事会員たちの前で語った幾つかの〔侮辱に満ちた〕言葉を取り消す義務を負うということであった。ただし後者の件には、ペーターは抵抗を示し、そして〔自ら〕進んで取り消そうなどとは思ってもいなかった。しかし、〔上記の〕二つの条件を受け入れるということは (es)、ペーターが〔まず、協力してくれた〕騎士団の前で〔アウクスブルク市参事会との訴訟を〕取り下げる〔ことへの了解を得る〕ことであり、次にアウクスブルク市に騎行して、市参事会〔へ謝罪する〕ことである。そればかりか、ペーターが〔かつて〕市参事会で何ら瑕疵のない政策〔や見解など〕をもすべて、市参事会の意向に従って、取り消す羽目になりかねず、さらに市参事会の求めが何であれ、ペーターはそれに答える義務を負い、さらにはそれらをすべて実行することにもなりかねない〔危険を伴うものでもあった〕。

以上〔当事者同士の仲裁案〕がミンデルハイム会談で宣言された時には、覚え書に関する両陣営の対立点は〔あらかた〕解消していたのであった。もちろん、些細な点 (ein klein pünctlin) ではその限りではなかった。〔この些細な点〔gastという言葉〕での躓きが、仲裁案の履行を阻み、そして最終的には、この仲裁案の現実的な執行 (die wirkliche Ausfürng) を台無しにしたのであった。〕

【補遺 10】 ミンデルハイム会談での騎士団側の参加者について⁽⁷⁾

聖ゲオルク騎士団側の主な参加者は、まず同騎士団の首領ベア・フォン・レヒバルク、次に騎士マルクヴァルト・フォン・シェレン

ベルク、そして騎士にしてブルガンの代官 (landvogt) ハンス・フォン・クネーリングンなどである。

【補遺 11】 ペーターがかつて市参事会で吐いた侮辱に満ちた言葉について⁽⁸⁾

ペーターがアウクスブルク市参事会で発言した「相手を侮辱し、また不遜な言葉」を列挙すると、例えば、「私ことペーターは貴族やそうでない者たち (edlen und unedlen) から脅されたり、彼らは私を跪かせ、また私を突き倒そうとさえした。」

「以前、市参事会がハンス・アルパースホーファー (Johann Alpershofer) やルードヴィヒ・ヘルンリン (Ludwig Hörnlin)、ネルトリンガー (Nördlinger)、ハンス・ランゲンマンテル・ツア・ラダウ (Johann Langenmantel zur Radau) に対し権力を行使した時に、私は権力 (macht) [の座に] に就かされた。」

「私は旧参事会員に、さらに現参事会員に対しても、悪意のない、不適切なそして不快なことを行なった。」そして、

「私は、アウクスブルク市参事会に対して、私および私のすべての親族 (al mein frund) が市参事会から、また富める者と貧しき者 [のすべての都市住民] からも今後、受けて当然であることを (das) 私に一任するようお願いしたい。」

【補遺 12】 ペーターの負うべき [経済的な] 義務について⁽⁹⁾

ペーターの [経済的な] 義務は、

- ① 貨幣製造局 (Münzhaus) の——〈アウクスブルク市民たちが彼のために作った仕事場の〉——建設代金として、300 ライン・フローリン金貨 (fl.Rh.) の支払い。
- ② ペーターの 1 軒の家作 (Haus) ——〈この家の価値は 600 (fl.Rh.)。これまで免税物件であったので〉——今後 3 年以内に、課税対象物件に戻る。ただし、彼には 300 (fl.Rh.) が返却される。
- ③ ペーターがアウクスブルク市から一代限りの条件で購入した貨幣秤量権 (Waage)、貨幣製造権そして関税権 (Zoll) ——〈彼が一

代限りの老後生活用資金〔定期レンテ (Leibgeding)〕で購入したもの〉——について、市に〔購入〕証書を提出する義務が発生。

- ④ 上記の権利の再購入には市参事会の同意が必要であり、一代限りの老後生活用資金を活用した購入は不可。
- ⑤ 市参事会が上記の権利を司教から購入する場合、ペーターはそれを妨害してはならない。
- ⑥ 3倍の追加税 (drei Nachsteuer) を支払えば、寄留者 (Gast) として同市への自由な (狡猾な不意打ちを食らうこともなく) 出入国が許可される。

〔B〕 仲裁案を台無しにした

「言葉〔ガスト (Gast)〕」から法廷闘争へ

(1) ガストとして公的宿屋への要請とメンツの問題

〔補遺 13〕 仲裁案を台無しにした要因⁽¹⁰⁾

〔ペーターがアウクスブルク市に入市し、宿泊しようとする場合〕アウクスブルク市参事会が彼に対して、彼の館に宿泊することを許可せず、むしろ〔寄留者 (gast) となった〕彼は「同市の公的な宿屋 (in ainnem offenem Wirtshaus)」に宿泊すべきことを要求した〔からであった〕。

つまり〔市参事会側の言い分は、あくまでも〕ペーター・フォン・アルゴン〔は寄留者であり〕、たとえ自らの必要性〔用事〕で (nach seiner notturft) 自分の所領〔の作柄の具合など〕を検分しよう (lugen) としてアウクスブルク市を訪れた場合でも、前述されたように、彼自身の館 (in sein aigen Haus) に立ち寄ることは禁じられており、同市の宿屋に宿泊する義務を負う、と。これに対して、〔ペーターの言い分は〕たとえ彼が同市を訪れても、そのような〔取り決め〕に従う気はなく、自分の館に馬で立ち寄る〔宿泊する〕ことは可能であるとの主張であった。彼は、「そのように考えるのが正当 (billich) であり、この事は自分〔が受け取った調停案〕の覚え書が証明している」との一点張りであった。

【補遺 14】 この点に関する両陣営の書簡の分析による F・フレンズドルフの解釈⁽¹¹⁾

彼は両陣営の書簡を手掛かりに、次のように言及している。すなわち、騎士団側の 2 人の代表人は 1452 年 3 月 27 日付の書簡で、市参事会側の〔ペーターの公的宿屋への宿泊〕の要請を奇異でありかつ不当なもの (fremd und unbillig) と呼んで批判していた。それは、すなわち、「昨年〔1451 年〕の 11 月 29 日の〔ミンデルハイム会談で〕当事者間で取り交わした仲裁案の中に、ペーターが想定した以外の項目が〔その後、いつのまにか〕紛れ込んであった。さらに、彼は〔それを〕実行する責任をも負わされていた。そのため、彼は上記の仲裁案に誠実に、しかも法律的にも従わされるところであった」と。

すなわち、市参事会側が昨年の仲裁案で合意されていない〈ペーターが公的な宿屋に赴くべきこと〉なる新たな取り決め項目 (neuerung) を仲裁案に紛れ込ませたのではないのか、と騎士団陣営は勘ぐっていたのである。

これに対して、市参事会陣営は 1452 年 3 月 30 日付の書簡で、ペーターはもはやアウクスブルク市民ではないのだから、我々の都市を訪問する場合、法に照らせば (billich)、ガスト (寄留者) として (als ein gast) 振舞うのが当然であり、我々市参事会には何らの瑕疵はない、と。

さて〔実際に〕ペーターがアウクスブルク市を訪れ、そして上記したように、すべての行動を実行に移そうとした時、——〈我々〔市参事会員たち (wir)〕は、ペーターが我々〔市参事会〕との裁判沙汰を回避するために約束を交わすことなどは何ひとつなかったのだが〉——〔これまでペーターを支持していた〕都市住民 (man) たちまでもが「貴方 (ペーター) 様は〔当市内においては〕貴方様のお屋敷へのお立ち寄り禁止されており、当市の公のお宿へ赴くように義務づけられておられます。」との声を上げたのである。しかし、そのような声に聞く耳持たぬ彼は約束〔仲裁案〕に反して馬で彼の館に向かった。ところで、ペーターが違反して馬で自分の

館に乗り込んだ時、事前に報告されていなかったこともあり、〔市参事会側は何ら有効な手を打てなかった。しかし、〕全能なる神は我々に「用心深さ (fürsichtigkeit)」、「思慮分別 (weishait)」、「判断力 (vernunft)」そして「知力 (sinne)」などを施され、そのために我々はこの件で自らのためにも最善を尽くすことができたのであった。すなわち、アウクスブルク市民たちはこの件を〔市参事会に〕通報させ、そしてペーターを〔一旦〕彼の館の中に騎行させるか、あるいは同市の公的な宿屋にお連れするかは、〔ペーターの決定に任せて、彼の行動を見守ったのであった。〕これは〔対立を回避するための〕最善の対応であり、十分に名誉を重んじて (mit großen ehren) 遂行した〔苦肉の〕対応であった。

まさにこの対応の問題 (die sache)こそが〔兩陣営にとってメンツに係わる大問題であり、それ故に〕最大の関心事であった。しかもこの点から〔兩陣営にとって一旦和解に至りかけていたミンデルハイム仲裁案は水泡に帰し〕、その後の多くの不幸 (unrat)、苦労 (mühe)、労苦 (arbeit)そして嘲笑 (spott)と大きな損失 (großen schaden)が発生するのである。

(2) ペーターによるブランデンブルク辺境伯の

ラント裁判所への告訴

ところで、アウクスブルク市民たちも、上記した〔アウクスブルク〕市参事会と同様に、ミンデルハイム仲裁案の受け入れを拒否し、そして「ペーターは都市の公的な宿屋に宿泊する義務がある」旨、主張していた。しかし、ペーターはそれを〔無視し〕履行しようとはしなかった。ところで、〔このようなアウクスブルク市側の〕主張はペーターを怒らせ、彼をしてアウクスブルク市民たちを〔ブランデンブルク〕辺境伯のアン斯巴ハ・ラント〔管区〕裁判所 (des marggraffens landgericht gen Ansbach) に告訴させる事態に至ったのである。

【補遺 15】 ラント裁判所への訴えの理由⁽¹²⁾

ペーターが1452年6月に改めてアウクスブルク市民に対する弁明のために、市参事会に同市を訪れたいと要求した時、彼はもし、自分のこの申請が聞き入れられない場合を想定して、他の裁判所へ訴

えると脅しをかけた（6月20日）。これに対して、市参事会は相も変わらず、ただ彼が市参事会に対して起こした訴訟の根拠を説明するように求めるのみであった（6月22日）。そこで、ペーターは直ちに、彼の脅しを実行に移した。すなわち1452年6月26日に騎士にしてニュルンベルクのラント裁判官のハンス・フォン・ヴァレンロード（Hans von Wallenrod）はアウクスブルク市参事会を召喚し、7月18日にニュルンベルク城代伯領内（Nürnberg Brugggrafenthums）のアン斯巴ハ（Onotzbach : Ansbach）のラント裁判所に出頭して、ペーター〔の意義申し立て〕に返答するように言い渡したのである。

アウクスブルク市民たちは、そのこと〔ラント裁判所へのペーターの告訴〕を些細なこと（klein）と見なし、嘲笑していた〔程であった〕。しかし、〔やがて、不安を感じたのであろうか〕アウクスブルク市民たちは〔元市長の〕アンドレス・フリッキングーという一人の市民を使者としてラント裁判所に派遣した。使者はペーターが訴えた内容を傾聴する聞き役の義務を負ってだけで、ペーターの訴えに答弁する権利は持っていなかった。

【補遺16】 ペーターが提出した訴状の内容⁽¹³⁾

ペーターが弁護士（fürsprech）を介して提出したアン斯巴ハ・ラント裁判所へ提出した訴状の内容は、彼に所属する年金〔定期金（Renten）〕と小作料（Gülten）に生じた損失の補償と、アウクスブルク市への入市禁止で実現できなかった同市への移動や帰還に係わる諸問題であった。

またペーターが同訴状を提出した理由は、彼が司教から購入した関税（zoll）〔徴収権〕に対してアウクスブルク市が課した措置、すなわち、彼が〔司教から買い取って〕所有する〔司教の〕領主権（die Rechte seines Herrn）の代行を阻止するためにとった措置、〔具体的には〕関税〔徴収権〕に関して、市参事会の決定で、彼が被った損失である。それは、①ビールとワインの屋台売り（Bier=und Weinschenk）〔に課せられた〕追加税（nachbann）⁽¹⁴⁾ と、②彼がアウクスブルク市内に所有している家屋〔家作〕や内畑（garten）からの地代や賃貸料（Zins und

Rente) などの徴収を妨害する行為から生じた損失であった。

アウクスブルク市民たちから使者として派遣されたアンドレス・フリッキンガーはラント裁判所〔での裁判の差し止め〕について、我らのこの上なく恵み深き主人たる〔神聖〕ローマ皇帝に（für unsern allernädigisten herren den römischer Kaiser）控訴する義務を担わされていた。

ところで、ペーターがラント裁判所へ〔の告訴の手続きに〕着手し、そしてアウクスブルク市民たちがペーターの訴えに対して返答しなかったことから、すなわち、ペーターに悪意を伴う行動をとっていたことなどから、その市民たちをも訴えだした時に、法廷の外では、市参事会員たちはペーターのことを、大真面目に、しかも辛らつな言葉で、たとえば、「奴（ペーター）は恥ずべきことにアウクスブルク市から馬に乗って逃げ出した」とか、また、「奴は市長職に就いていなかった時でも、『市長』然として貧しき者にも富める者にも、私ことチンクも書こうとも思わない程の多くの言葉を用いて〔約束事〕を宣誓していた」とか、さらに、「奴は我々の主人たる皇帝陛下に、上記したように、控訴した」などと、悪い噂を立てていた。

市参事会の使者〔アンドレス・フリッキンガー元市長〕は再度〔皇帝の許に〕赴き、そしてこの〔皇帝への〕控訴でもって調停されることになるであろうと思ったのであった。しかし、ペーターはこの使者の考えとは異なり、彼は自分のためにも、法〔裁判〕によって、あくまで、私たち市参事会をアハト〔追放〕刑に追い込むまで訴え続けたのである。私たち〔市参事会〕はそのようなこと（das）とはまったく思ってもいなかった。しかし、ペーターはあくまで自ら裁判〔で自分の正当性〕を要求し、また自分の損失の見返りにかなりの補償を得ようと考えていたのである。

（３） アンスバハ・ラント裁判所での審理とその意外な結末

【補遺 17】 ラント裁判所での両陣営の法廷陳述とその展開⁽¹⁵⁾

アンスバハ・ラント裁判所の法廷でペーターの訴状に抗弁したのが、アウクスブルク市の名においてこの法廷に出廷した〔元市長：

1450年度] アンドレス・フリッキンガーと同市の公証人 (Notar) オズワルド・ハインツェル・マイアー (Oswald Heinztel Mair) の2人であった。

◆裁判開始時における都市とラントの自由の優越性をめぐる論争

1) アウクスブルク市陣営の申し立て

まず、2人の代表者は、同市が「都市の」自由「特権 (ihre Freiait)」を盾に、ラント裁判所から自由である「拘束されない」旨、主張した。その証拠として、印章は付いていないものの、アウクスブルク市の特権状の写し (eine unbesiegelte Abschrift ihres Privilegs) を読み上げさせた。

2) ペーター陣営の、アウクスブルク市陣営への抗弁

これに対して、原告のペーターはまず、「弁護人 (Fürsprechen) を伴って出廷しない者はいかなる者といえども、同ラント法廷では傍聴したり、抗弁したりする権利はない」ことを要求して「アウクスブルク市陣営に釘を刺し」、更に市陣営の上記の抗弁内容「すなわち、ラント裁判所から自由なアウクスブルク市の存在」そのものに関しても、原告 (ペーター) は「常々、ラント裁判所は「神聖」ローマ皇帝やドイツ国王から拘束を受けない、この事 (das) は一般の選帝侯たちによっても (durch die gemainen Churfürsten) 確認されていること、〔皇帝や国王などが臨席しない場合には〕直接 (ohne alles mittel)、皇帝や国王の次に〔位置する〕人物 (nechte nach einem romischen Kaiser und Konig) がすべての法廷を正しく仕切らねばならないこと」などを耳にしている、と抗弁し「アウクスブルク市陣営の申し立ての却下を暗に求め」た。

3) 同ラント裁判所の書記官からアウクスブルク市陣営への注文

加えて、同ラント裁判所のラント書記官 (Landschreiber des Landgerichts) ヨハン・ウルマー (Johann Ulmer) が、「もし、貴殿「アウクスブルク市民」たちがご自分たちの自由「特権」を証拠として引き合いに出したいのであるならば、貴殿たちはその自由「特権の内容など」を公判「裁判の手続き: (gerichtshandlung)」の中で説明されねばなら

ないし、また裁判の審査対象に加えなければならない」と、注文をつけた。

それから、同書記官はラント裁判官の自由〔特許〕状をその〔都市の自由特許状の写しの〕近くに置き（dabei legen）、そしてそれらを比べて（dagegen）読み上げさせようとした。こうすることで、どちらの自由が他方〔の自由〕に対して優位であるべきなのかを一目瞭然にしたのである。

その他にも、〔同ラント裁判所が調査してみたら〕、アウクスブルク市（die Stadt）はほぼ3ヵ月前の頃に、本訴訟で問題にされている同市の独自の自由〔特権〕に背いた騎士コンツェン・ヴォルフ・フォン・ハイデック（Contzen Wolf von Haideck）を、同ラント裁判所〔に訴えられるの〕を恐れて（vor diesem Gericit）、アハト〔追放（Acht）〕刑から解放し、同ラント裁判所に恭順の意を示した〔事件を指摘した〕。もし〔このような法行為をとっていた〕アウクスブルク市陣営が〔殊、本件に関して〕控訴（Aeppellation）を申し立てるのであれば、それは〔ダブルスタンダードであり〕恥ずべき行為（frevenlich）であろう。また〔そのような前例があるので、本件を断念しても〕苦情などは全く起こらない（ohne alle beschwenus）のではないか。そこで、〔チグハグで二重基準の対応を指摘された〕アウクスブルク市民たる上記の2人の代表者は〔都市自由の優越性をめぐる予審〕裁判を放棄したのであった。

これを受け、裁判長（Richter）の諮問に対して、〔同ラント裁判所の〕法廷は、一般的な結論〔ラント裁判所の自由が都市の自由より優越し、それ故に、本件でもラント裁判所で審議可能〕との判決をもって（mit gemeiner Folge und Urteil）答申とし、〔アウクスブルク市の申し出を却下し〕たのであった。

◆法廷戦術の変更を迫られたアウクスブルク市陣営とその秘策

1) 法廷戦術の変更を迫られたアウクスブルク市陣営が採った孤立策

〔しかし〕アウクスブルクの市民たる上記の2人の代表者は、裁判が〔本審〕に入れば、何らかの正当性（was Rechtens）が生まれるはず

であると考え直した。そうでなければ、ペーターの訴えは「アウクスブルク市に」彼との和解を促すことになり、ペーター陣営が正義(Recht)、即ち「勝訴」してしまうことになる。

果たせるかな、後者のケースが起きてしまった。そこで、上記の決定に対して、アンドレス・フリッキンガーと共に出廷していたアウクスブルク市の公証人オズワルド・ハインツェル・マイアーが、以下の4人、即ち、ジョス・ベッツリン (Jos Betzlin)、ベルトルト・プフィンツィヒ・フォン・ニュルンベルク (Berthold Pfintzig von Nürnberg)、ハンス・アインキルン・フォン・ネルトリンゲン (Hans Aiskürn von Nördlingen) そしてザイツ・ベルリン・フォン・デインケルスビュール (Seitz Berlin von Dinkelsbühl) の証人たちを前にして抗議 (Protest) した。この抗議の中には、アウクスブルク市が上記の決定をめぐる、皇帝「フリードリヒ3世」に上告することも含まれていた。

同時に、アウクスブルク市陣営はペーターに以下のような「3点」の内容、すなわち、①ペーターによる同市の自由「特権」に反する試みを即座にやめさせること、また②そのためにも、同市の自由「特権」に従って損害の補償や賠償をさせるべく、彼を同市に帰還させること、そして③彼の返事を8日以内に送付させる催告状 (Aufforderung) を準備しようと企てたが、最終的には実行されることはなかった。そのため「我々「市陣営」はペーター陣営に対する我々の最善策 (die notturft) を「早急に」講ずる必要にせまられる」こととなった。

2) ペーターに代わり、再抗弁する騎士団陣営の首領ベア

他方、「自分の主張を強く述べない」ペーターに代わって、騎士団の首領ベアは、「ペーターが自分は「まだ」法の保護を喪失した立場 (Rechtlos) に至ってはいないと主張していたので」、ようやく (endlich) 「意を決して」アウクスブルク市以外の別な裁判所 (ein fremdes Gericht) に控訴しなければと考え、再抗弁した。

しかし、「このような「入れ知恵」はベア自身が考えた戦術ではなく、

「自分（ベア）が〔どうしても〕ペーターの力になりたい」と言う〔情にほだされた〕書簡書記官（Briefschreiber）が「奴ら〔帝国都市アウクスブルク〕にとっても、また我々〔帝国騎士〕にとっても——〈全ての世俗法（貴族）と自由特権状（帝国都市法）は共に同じ皇帝を根源にしている（von dem alle weltliche recht und freiheit sliessen）ので〉——正当な主人である皇帝のご臨席を仰いで、——〈皇帝がダメであるならば、枢機卿にして司教たるペーター・フォン・アウクスブルク猊下（Kardinal=Bischof Peter von Augsburg）⁽¹⁶⁾やプファルツ宮廷伯フリートリヒ殿（Pfalzgrafen Friedrich）のご臨席を仰いで、〔また、これらの人物がダメならば、〕その他の諸侯たち（andere Fürsten）のご臨席を仰いで〉——何の留保条件をもつけない法〔裁判〕に（zu unverdingtem Recht）訴えるように」と知恵をつけたのであった（erklärte）。ベアは、これならば奴ら市参事会陣営を満足させられるであろう、と判断したのであった。

3) これに対するアウクスブルク市参事会陣営の新たな対応策

しかし、そうはならなかった。アウクスブルク市参事会陣営は、このベアの提案から、騎士団がペーターを〔決して〕見捨てないことを知るに至った。そこで、市参事会側は逆に、ペーターが同騎士団に〔正式に〕入団する前に〔裁判〕交渉を始めることを主張し、〔そうすることで〕市参事会側は、この裁判の件で、騎士団にこれ以上ペーターへ肩入れさせない〔のが重要である〕こと〔すなわち、ペーターを騎士団から切り離して、孤立させる案〕に思い至ったのであった。

◆ペーターとアウクスブルク市の

ツンフト親方たちとの信頼関係の破綻

【補遺 18】 ツンフト団体からも切り離され、孤立するペーター ⁽¹⁷⁾

◆ペーターからツンフト側への「安全と護衛」の要請

ペーターは市参事会との〔裁判とは別に〕往復書簡での交渉においても自己の主張を強調することはほとんどなかった。むしろ、彼は個人的に、かつて築き上げたツンフト親方たちとの友好〔信頼〕関係

を足掛かりに対処しようとしていたのであった。そこで、彼は9月2日に彼の身に降りかかった名誉棄損〔中傷〕を弁明するために、アウクスブルク市のツンフト〔団体〕に「安全と護衛 (Sicherheit und Gelait)」の要請を依頼した。同市のツンフトからの返事は以下のようなものであった。

◆ツンフト側の「護衛拒否」の返書〔1452年9月12日付の書簡〕⁽¹⁸⁾

「ペーター・フォン・アルゴン殿は——〈ご自身の不正な私益 (eurs aigen gefährlichen Nutzen) をめぐって行なった不正のため、我々の主人たる市参事会の顧問団 (rattgeber)、我々の都市そして我々〔ツンフト〕と対立し、そのため我々ツンフトも〔表立って、貴殿に〕従うことが困難になった。それ以降〉——我々に〔なんとなく〕よそよそしい態度をとり、さらに上記の件をめぐって〔アウクスブルク市の都市裁判所とは〕異なる〔ラント〕裁判所 (fremdben gerichten) に訴え、その判決によって解決しようと目論んでおられた〔と、我々ツンフトは理解しております〕。

〔そのためか〕貴殿が我々ツンフトに親しみのあるお言葉で認めた書状とそこに記されている懇願〔内容〕から、我々のすべての先達が示してきたのと同じように、我々にも〔貴殿を〕敬虔で、様々な点において名誉ある人物として常にうまく折り合い、そしてこれまで通り〔素直に貴殿を信じて〕支持することを求めておられる。

しかし、我々も貴殿のことを好きであったわけではないし、また貴殿の思い通りに、貴殿の〔ラント裁判所へ訴え、その判決で〕解決しようとする目論みを理解〔支持〕していたわけでもありません。貴殿のそのような決意はこれまで我々ツンフトの間にも知れわたっておりましたが、我々はこの点に関して貴殿を称賛する噂を耳にすることはありませんでした。

貴殿は、我々の威厳あるアウクスブルク市の誰が〔貴殿の〕護衛 (gereit) をさせる〔権限を持っているのか〕十分にご存知でしょうから、我々ツンフト団体 (unsere gemain) がその任務を行なうことは、——

〈たとえ我々の名誉ある同市の市参事会と差迫った問題〔案件〕をめぐって交渉するよう命じられた場合であったとしても〉一、不可能であります。なぜなら、貴殿の申し出〔護衛の依頼 (eur sachen)〕は〔貴方からの〕命令として、しかもツunft団体そのもの (an in selbs)〔を名指しで〕発せられたもの以外の何ものでもないことが述べられている〔と理解される〕からです。その中でも、そのような〔ツunftへの護衛の依頼〕はこれまで極めて稀なことであり、〔むしろ〕護衛 (die Sachen) という性格から判断するならば、その依頼先には良き出自〔たとえば高貴な家柄〕の人物 (wohl geburt) が行なうべきことであるように我々ツunft団体には思われてなりません。〔加えて〕我々の都市では、〔貴殿への〕同情は一切、〔我々の〕耳に入ってこないし、また我々にも、たとえあらゆる名誉に背いたものである上記の要請を貴殿と合法的にうまく合意に漕ぎ着けたとしても、それは貴殿から不当に合意させられた〔と認識されるでしょうから〕、貴殿には一層不利にはたらくことになりましょう。……〔中略〕……我々ツunft全員のために、ジモン・ツォルラー (Simon Zoller)〔商人ツunft代表者〕、ハンス・ヴィテル (Hans Vittel)〔小売商ツunft代表者〕、ルードヴィヒ・ヘルリン (Ludwig Hörlin)〔肉屋ツunft代表者〕そしてクラウゼン・グランダー (Clausen Grander)〔製塩業者ツunft代表者〕の4ツunftの印章をつけて——〈今回は、上記の4つのツunftの印章を使用〉——、1452年9月12日にこの書簡を発送。

我々ツunft全員と全共同体のために (von unser aller und der gantzen gmaind wegen)。

アウクスブルク市の全ツunft、新・旧ツunft親方たち、そして12人衆 (Zwelffer)」

このようにして、ペーターがアウクスブルク市内で信頼できると思っていたツunft団体からも切り離され、彼は孤立感を深めていった。

◆本来の財産関係の裁判について

【補遺19】 本来の財産関係の引き渡し要求について⁽¹⁹⁾

とは言え、アウクスブルク市陣営との訴訟はその間も続いた。

1452年8月9日に、アウクスブルク市長レオンハルト・〔ランゲンマンテル〕・フォン・ラダウ (Leonhard [Langenmantel] von Radau) に対して、債権者への財産引き渡し (die Anlait) が、しかもその引き渡しの件では6週間と3日以内に返答せよとの要請も付記されて、布告された。こうして、ペーターは彼の財産の引き渡しの件でも、〔彼がラント裁判所へ〕正当に告訴し、そして〔勝訴の〕判決を得るまで、またアウクスブルクの市民たちの生命をも含めて、彼らをアハト刑 (die Acht) に至るまで、さらに同市民たち〔が差し押さえた〕全財産〔動産や不動産 (Gut und Habe)〕を債権者たる彼に引き渡されるまで、訴訟は非常に長きにわたって続いた。他方、アウクスブルク市も、その裁判の間は、同市の義務を果たした。

◆皇帝からのラント裁判差し止め通達状について

【補遺 20】 ラント裁判差し止め通達とこれを巡る両陣営の思惑⁽²⁰⁾

同年10月4日に、ラント裁判の審査が再開された。ペーター陣営の代理人〔法律顧問 (Anwalt) にして弁護士 (Klagführer : Anwalt)〕たるダニエル・ウルマーは、今や、債権譲渡官 (Anlaiter) たるハンス・ホルツベルガー (Hans Holzberger) にペーターの全権とその書状〔Vollung und Volbrief〕を引き渡すように請願した。これによって、ペーターがかつてその所有が認められていた〔が、今では〕同市の市民たち〔が差し押さえている〕彼の全財産〔動産や不動産〕の所有権を付与 (Immission : Besitzeinweisung) することができるようになった。

〔ところが〕そのラント裁判所に、〔突然〕皇帝〔フリードリヒ3世〕からの1通の裁判差し止め通達状 (die Inhibitionsbrief) を持参したアウクスブルク市の伝令使 (Scheinbot) が現れた。〔その通達状によると、〕ラント裁判所で審議されている訴訟案件はこれ以上の審査は不要であり差し止めにする、その訴訟案件は皇帝〔フリードリヒ3世〕ご自身の許に直接、持参せよ、ということであった。

これに対して、ペーター陣営の代理人ダニエル・ウルマーは〔いき

なり〕「ヴェストファーレン〔フェーメ秘密裁判所〕⁽²¹⁾」からの召喚状(westfälische Ladung)』を呈示した。——〔これは、おそらく、アウクスブルク市側が皇帝でさえアンタッチャブルなフェーメ秘密〔自由〕裁判所に判断を仰ぎ、一気に決着をつけようとして、かなり前から裏で手を回して同秘密裁判所に提訴していたに違いない。〕——その召喚状で、アウクスブルク市民たちはペーターをヴェストファーレンに、すなわち、上フォルマルシュタイン〔地域〕のブルクホーフ城塞前に位置するフォルマルシュタインにある秘密〔自由〕裁判所(frei Stuhl zum Volmarstain vor der Burg in dem Burghof obendig Volmarstain)に出頭するように求めていたのであった。

〔ペーター陣営にとって〕この意味するところは、アウクスブルク市が彼ら自身の皇帝への上訴を回避し、そして皇帝の裁判差し止め通達を無効にするためであった。しかし、ラント裁判所(das Gericht)の認識はこれとは全く逆であって、〔ラント裁判所は〕皇帝の裁判差し止めに応じざるをえず、そして如何なる完全な証書(kein Vollbrief)なるものは交付されないと踏んでいた。すなわち、皇帝の裁判差し止め通達以前に〔下された〕決定〔判決〕などは(was vor der Inhibition geurteilt)有効であるばかりか、優先権をも持つはずである(solle Kraft und Furgang haben)、と。

(4) アウクスブルク市による宮廷裁判所への上訴とその判決

【補遺 21】 アウクスブルク市の代表者の役割と皇帝の同市に対する不満の心情⁽²²⁾

両陣営は皇帝〔フリードリヒ3世〕の御前に赴く準備をした。アウクスブルク市参事会は10月12日に〔前市長：1451年度〕ハインリヒ・ランゲンマンテル(Heinrich Langenmantel)と〔元市長：1450年度〕アンドレス・フリッキンガー(Andres Frickinger)に同市陣営の「決定権と請求権(Spruch und Vordrung)」からなる全権⁽²³⁾を与えた。これは、ペーターによる同市の自由〔特権〕に背く違反行為に対して、処罰(Ben)と損害(Schaden)に〔迅速かつ有効に〕対処するためであっ

た。彼ら代表者は、また〔御前（宮廷）〕裁判の経過、他所〔フェーメ〕裁判所への告訴の件そして相手〔ペーター〕陣営の不当な損害賠償請求をめぐるペーターとの交渉の結果などを報告せよとの指示も受けていた。〔しかし〕主な点では〔すでにラント裁判所で〕判決が下されていたので、彼ら〔の主な役目〕は、ペーターが〔不当な損害賠償を求めないように〕彼が市長在任中、いかに職務を疎かにしていたか、また同市参事会をどのように中傷していたのかを〔皇帝に〕思い出させることであった。

皇帝は〔密かに〕「本訴訟案件においても、アウクスブルク市民たちが〔あくまで〕自らの開廷日（auf seinem Rechttag）に法〔裁判〕を執り行なうべきであり、〔フェーメなどの〕他の法〔裁判〕への控訴などは禁止し、あるいは円満な〔当事者同士での仲裁〕会談（einen gutlichen Tag）で〔の解決に〕努めるべきである」と思っている〔節が窺われる〕。〔それ故、皇帝は〕「汝らアウクスブルク市民たちには、余ですら腰が引けるヴェストファーレン〔のフェーメ〕〔裁判所〕で、〔この案件を〕片づけ〔解決す〕る能力〔力〔gewalt〕〕などないし、また円満な〔仲裁〕会談で〔解決する〕能力すらも持ち合わせていない〔それ故に、皇帝陛下のお力におすがり致します〕と余に伝えるべきであろう」と〔胸中を吐露されたのである〕。〔「それなのに、よりによってヴェストファーレン〔のフェーメ〕裁判所に〔解決を〕頼るとは何事ぞ！」との、皇帝のアウクスブルク市への不満が見え隠れする文言であるように思われる。〕。

ところで、アウクスブルク市民たちは、同市の主人たる神聖ローマ皇帝〔フリードリヒ3世〕が、①上記の案件をすべて自ら取り上げ、そしてペーターが我々アウクスブルク市民に対して要求していた権利とアハト刑をすべて却下するように、②また皇帝が、宮廷裁判が開催される前に、アウクスブルク市民たち〔の法的手続き〕とペーター〔の法的手続き〕との間で、正しいのは何〔どちら〕かを、即ち、アウクスブルク市民たちが行なった上訴は正当であったのか、それとも不当であったのか（recht oder unrecht）について、他方ペーターが

〔アウクスブルク市民たちを〕 ラント裁判所へ召喚したことは妥当であったのか、あるいは不当であったのか (billig oder unbillig) について、正しいのは何〔どちら〕かをご判断されるように仕向けた。〔訴訟の流れは〕今やその方向で行なわれ、そして決着された〔ようであった〕。

そこで、その訴訟 (das recht) が皇帝の宮廷裁判所に移されるや、アウクスブルク市民たちはペーター・フォン・アルゴンを宮廷裁判所に召喚し、同裁判所に上訴した。すなわち、ペーターはアウクスブルク市民たちに多大な損失を与え、そして同市民たちを不当にも〔ブランデンブルク辺境伯の〕アン斯巴ハ・ラント裁判所に訴え、そして召喚させた〔本人である、と〕。もし応じなければ (sunst)、〔アウクスブルク市民は〕他の〔たとえば、ヴェストファーレン地方のフェーメ〕裁判所に訴えんばかりの〔勢い〕であった。そうこうしている間に、ペーターに関して、上記されたように、〔ラント裁判所から〕判決が下ったのであった。

従って、アウクスブルク市民たちが宮廷裁判所に告訴をした時には、——〈ペーターは〔すでに〕彼ら〔アウクスブルク市民たち〕に「私は貴方たちを〔ブランデンブルク辺境伯の〕アン斯巴ハ・ラント裁判所に訴え、同裁判所で貴方たちに対する大きな権利 (große recht) を、かつ貴方たちを合法的にアハト刑で処断しえる〔権利をも〕要求している」旨、返答していた。〉——ペーターは〔上記ラント裁判所への〕控訴の件に関して、今や〔同ラント裁判所からの〕立派な裁判判決証書を所持しており、しかも証書には必要な同裁判所の印章さえ付いていたのであった。それ故に、ペーターには〔宮廷裁判所においても勝訴するという自信があるのか〕、神と法 (Gott und Rechten) 〔の判断〕を信頼しきっていたようであった。

〔他方、〕アウクスブルク市民たちはペーター本人を〔法的に〕まったく不当 (unbillig) にも皇帝の宮廷裁判所に召喚し、そして高額の罰金 (groß wands) を請求したのであった。

◆宮廷裁判所の判決——アウクスブルク市側の敗訴⁽²⁴⁾

ところで、皇帝の宮廷裁判所では、判決として (zu recht) 「アウクスブルク市民たちが〔帝国の〕秩序を乱し (unordenlich) かつ不誠実にもアンスパハ・ラント裁判所〔が判決を下す前に、皇帝に〕上訴した」と認定され、そして宣告されたのであった。

すなわち、アウクスブルク市民たちは、アンスパハ・ラント裁判所が判決を下す前に、〔皇帝に〕上訴したのであり、この点をめぐって、宮廷裁判所は「アウクスブルク市民たちが〔帝国の〕秩序を乱して上訴した」と認定したのであった。アウクスブルク市民たちの多くが、この〔敗訴という〕判定にはおおいに不満であった。

〈以下、次号へ続く〉